

色彩調和と色彩調和論に関する雑感

Comments on the colour harmony and its theories

名誉会員・松田 豊

1：『美的価値』『色彩調和』『配色』

環境であれモノであれ色は一色だけを見ることは先ずありえない。意識の有無に拘わらず複数の色が同時に眼に入り、それらの色が相関しながら、ある効果が生じる。それが自然であろうが人工であろうが、無意識的であろうが、意識的であろうが、生理的・心理的に快感・不快感をもたらす。その快感が『美的価値』を生じる。それが『色彩調和』であろう。意識的に色を組み合わせで成立する美的価値が『配色』の成果と考えている。

2：創造性が色彩調和の課題

具象的であれ抽象的であれ、“複数の色”の組み合わせ方によって、美的価値が大小・高低に別れる。組み合わせ方によってはマイナスになることも多い。どのような色をどのように組み合わせると、より高い、より大きな価値が生じるのか？。その自由な組み合わせを考え、創造的な価値を追求するのが色彩調和の課題であろう。

3：色彩調和論

これまで各種の色彩調和論・配色論が構築されている。傾聴すべき理論であるが、その多くは普遍的・観念的な結果にならざるを得ない宿命にあると思う。その理論にしたがって忠実に再現して調和の美を得ることは可能であるが、『美』には高低はあるが上限はない。色彩の美の多くは時と共に変貌するので、調和論を超越して、創造性がないと高い美が生まれない。言い換えれば、色彩調和論は分析結果だから、その再現では創造性は生まれない。したがってその美に限界が生じるのはやむを得ないのではないか。色彩調和論はマニュアルとして『色彩調和の底辺を支える類型である』といえるのではないだろうか。また色彩調和論が完璧であるとするならば、調和を構成する各々の単色の良否と、色の選択にお

ける必然性が価値を左右する筈だ。いずれにしても調和論を超越してこそ創造的な色彩調和の美が存在する。

4：感性が優先する

色彩調和の価値は『論』の類型を越えたところで成立するので、色彩調和の美は感性が全てを支配する世界であると思う。

5：普遍的な感覚とローカルな美

色彩調和は国と時代を越えた、同系段落ち配色のような、明暗濃淡のリズム感が快い、普遍的な感覚に支えられる美と、和服をはじめ民族服の色彩のように長い歴史と伝統的文化に培われた、ローカルな感覚に支えられる美が存在する。前者はより生理的快感（快適性）に近いのではないか。後者は心理的哲学的で、裏付けられる意味が深く、一見単純に見えるがより高い位置にその美があると思う。

6：視神経疲労に注目したい

『モノ』の用に見合う色や、風俗習慣や環境の差で生じる、色彩の良し悪しの判断には、視神経疲労が絡んでいるのではないだろうか。

網膜の視細胞内の視質が可視光線の刺激で光合成により変質し、電気信号に変わって視中枢に伝わり、色を感知するが、同一刺激が繰り返し与えられると視質の変質と復元が鈍り、それが美醜に影響を与えると考えられないだろうか。時空間の経過による美の変遷を重視しなければならない。色の変遷推移は眼の生理的な働きに要因があると考えている。

7：色彩調和と色彩調整を峻別する

調和はHarmony、調整はCo-ordinationであるから意味と次元が異なる。前者は目的意識を有し価値を意味する。後者はより良い解決を図る妥協の意味を

含む。また色彩調和によってもたらされる『美的価値』を生む行為が『配色』と考えている。

8：画一性と個への対応

造り手は生産性向上を優先して傾向対応を重視するので、少品種大量生産商品が市場を形成する。一方使い手は自我を明確に主張し、個別化・個性化を求める。これは大きな矛盾をはらんでいる。その解決手段として『組合せによる多様な展開』で『個への対応を図る』企画が立てられた。結果として Colour Co-ordinationが志向されるので、普遍的な配色美を構成できるカラースキム（Colour Scheme = 色彩計画案）の構築が成否の鍵になった。

9：集約による強調

時節を象徴する色、時季が必要とする色に多くは必要ない。多色を訴求すると意図がボケて主張が曖昧になる。ある時季のある商品を色彩で演出する場合は、明確に主張を訴求するために、可能な限り少数色に集約して、意図を強調しながら、組み合わせ（配色）で多様に展開出来るようにカラースキムを構築しなければならない。

配色の美にも新旧があり、あるサイクルを有して構成が変移すると考えている。適切な色と色数に集約して主張を明確にし、傾向にあった配色効果で色彩の訴求を強調したい。

10：色彩の時代感覚

『色彩調和＝美』を構築するのに、感性が全ての役割を果たすとすれば、文明文化の影響と、時間・空間の変化につれて、美の観念と評価は常に変化すると言えよう。色彩の時代感覚を『どう捉え、どう表現するか』は、絶えず色に接し、時代の尖端に生きる感覚を錬磨しておかなければ、美を創造し高い価値を生むことが出来ない。

11：色の面積と配置の必然性

色彩調和と色彩効果を生む配色行為は、配色を構成する単色それぞれが、『その位置』に『その面積』で存在しているという、色の使い方に必然的な裏付けがなければならない。その色群の配置と分量と単色の選択の厳しさがなければ『美』が成就しない。

12：視覚効果と触覚効果の連携を

多くの場合『色彩調和』は単に視覚効果だけでは成立しにくい。モノの意味や存在。柄や形の性格。着色ベースと着色材の視覚効果と触覚効果の必然的な整合性で説得するものだから、場合によっては聴覚効果を加え、全感的に訴求の条件を整えなければならない。プリント服地を例にとるならば、その配色は柄パターンとの整合性と同時に、布地と柄との調和、及び色調の効果で布地の風合いがもつ触覚効果を表現しなければならない。またプリント柄の配色は、配色構成タイプの流行推移が、成否を大きく左右するので対応を重視しなければならない。

13：色の訴求効果を知ること

色彩調和を構成する場合、一色一色のもつ生理的・心理的な意味と効果を知悉することに努めている。一つ一つの色が発現する効果を最大限に尊重したい。とは言っても配色構成した色の全てがはたらき、共鳴しあって、全体的総合的に色効果を発揮させる場合もあれば、ある特定の色の効果を演出するために、他の色を犠牲にする場合も存在する。

14：訓練でセンスを磨く

同一の色相でも、色調が変わると印象・効果が変わる。配色の前提条件として一つ一つの色相の効果、色調の変化による微妙な差異と意味を出来るだけ細かなステップ（最低でもPCCS色体系のステップ1くらい）で知悉していなければならない。その知悉している色相・色調のステップが小さいほど緻密で優れた配色が可能である。

最終的には天性が左右するものの、色彩の感性は訓練によって向上する。また色の適用と配色感覚は、訓練し経験を重ねなければ技として向上し、高度の配色構成を創出できないと思う。さらに感動を与え得る新鮮で高度な色彩調和は、訓練を積み重ねなければ生まれないと思っている。また配色感覚を向上させるにはPCCS色体系に基づいて、48色相×25色調＝1200色位の、それぞれのカラーアピランスを知悉すると良い結果を生みやすい。

15：美感に変容する

色に流行の消長があることでわかるように、配色構成にも流行がある。時の経過につれて美を受け止める意識が変動するのは否定できない。従って色彩調和の美は絶対的なものではないと考える。

16：論理を越えて

成功した多くの配色例から色彩調和論を構築するのは可能だろう。しかし逆に調和論にしたがって、より新しい、より優れた配色調和を生むことは難しいと思う。

過去の美の類型から脱却する創造性がなければ感動が生まれないからである。色彩調和論では配色効果のすべてを説明しきれないだろう。創造性にたいして論理性で満足できるだろうか。

17：相乗効果でオーラを

配色において、一つ一つの色が持つ効果が生きている『彩り』には色各々が共鳴しあった相乗効果で美しいオーラが出る。それをもって『色彩調和の成立』と考えている。

色彩にはだれにでも理解できる普遍性がある。そして色彩調和は好き嫌いを越えて存在する筈だ。配色で有無を言わさぬ美を構築したい。

デザイナーにとって色彩調和論が、配色のマニュアルを越える存在であってはならない。マニュアルは平均点を目指しているものと考えられるからである。

18：材質の効果を加える

Personal color workは人に伝わる自分の印象を、どのように演出するか『着手と着衣の色との、より良い調和を見つけだす』行為であろう。言うならば、人の印象を感性で捉えて『その人』と『衣服の色』とのより良い調和を見つけだす行為だろう。それには説得力を増すために色の効果だけではなく、衣服素材の表層効果と、衣服デザインがもたらす印象も無視できないだろう。

19：色彩調和には

①環境の色彩やインテリアの色彩のように、回りを対面視する美の場合と、
②衣服のように、肉体や顔と一体化して色彩調和を図り、美を訴求する場合の、
二つが考えられる。調和した回りに包含されて感じる受動的な美と、調和によって存在を主張する能動的な美があるだろう。この①と②は『包含されることによる安らぎを目的とする美』と『人格と存在を主張し、訴求する美』と言えるのではないか。

20：配色の良否はは構想の良否

配色訓練の材料である同じPCCS配色カードの199色を使っても、配色に良否の差異が生まれるのは、単色の選択と、面積比の設計と、色のはたらきを表現する意図の差にある。色選定の前提となる配色カードの設計構成意図を知悉しているかどうかも配色の上手下手に大きく関与する。

21：束縛される事なく衝撃的な印象を

色彩調和論は尊重しなければならないが、それに束縛される事なく、超越して、色それぞれが持つ性格と美を見つめ、組み合わせ、理屈抜きに見る人々に、衝撃的に快適な色彩感動を与えなくてはならない。

22：自然物の色彩を観察すると

自然物の色は調和が成立しやすい。それは一見単純に見える色であっても、拡大し熟視すると微細に複雑な色が混合しているからだろう。それに比べると人工の色は単純であり、主張が強い。そのため組み合わせにおいて融和しにくいといえよう。

色彩と人を結ぶ、色彩調和の世界は広く深い。色による快感の追求は人類の究極の課題のようだ。

以上